

# 1 妻木晩田遺跡の焼失住居について

## はじめに

妻木晩田遺跡は、縄文時代から奈良時代までの約2800年間に800基以上の落とし穴、404基以上の竪穴住居、504基以上の掘立柱建物など多数の遺構が検出されている複合遺跡である<sup>①</sup>。このうち、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけては、いくつもの丘陵上に集落が営まれる日本を代表する集落遺跡となる。とりわけ、弥生時代後期には集落規模が最も大きくなり、松尾頭地区で突出した首長層の住居、祭殿と考えられる建物が存在するなど、この地区を中心として各集落単位が結合した集落群を形成しており、少なくとも、淀江平野を中心とする西伯耆地域の拠点集落の一つであったものと考えられる。

こうした状況のなか、多数の焼失住居跡が確認されている。

## (1) 焼失住居の判定基準について

妻木晩田遺跡に限らず、焼失住居について考える際に、それをどう判別するかがまず前提となる。今回の判定基準は、寺沢薫氏の基準に当てはまるものに限った<sup>②</sup>。

しかし、今後念頭に入れておかなければならないことは、炭化材は、構造材が完全に燃え尽きていないから遺存したのであって、完全に焼失してしまえば灰しか残らないか、わずかな炭化物の出土にとどまるか、もしくは何も残らないのではないかということである。

焼失住居として認定されるものについては、住居の構造としては、土屋根住居であった場合に遺存する確率が高いと思われる。現に、妻木晩田遺跡妻木山地区S143、南谷大山遺跡A区S101・B区S120などの焼失住居跡は、土屋根の可能性が指摘されているものである。

焼失住居＝土屋根とは断定できないが、一般に茅葺屋根と考えられている住居が焼失した際に、どのように炭化材が遺存するのかを確認、検証する必要がある。焼失実験などを通して判断されるべき問題が残っていると共に、なぜ炭化材が遺存したのかという問題と、完全焼失した住居の場合をどのように判別するのかという課題を解決しなければならない。

よって、実際には、現在焼失住居と判断したもの以外に、より多くの焼失住居が存在している可能性があることは否定できない状況であることは断っておく。

## (2) 妻木晩田遺跡の焼失住居跡

妻木晩田遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての焼失住居跡が計18基見つかり、県内でも検出例が多い遺跡である(表Ⅱ-1-1)。

焼失住居跡は、住居の上屋構造を推定する極めて重要な資料である。近年、弥生時代にも明らかに土屋根として復元できる竪穴住居の存在が知られるようになったが、当遺跡からも良好な焼失住居が検出され、これを元に土屋根竪穴住居が復元整備されている。竪穴住居の上屋構造の復元については浅川滋男氏が詳細に検討されており<sup>③</sup>、ここでは触れないことにし、その他の問題点について言及してみることにする。

当遺跡では、弥生時代後期のものが16基、古墳時代前期のものが2基検出されており、弥生時代後期が圧倒的であるという特長がある。この時期をさらに細分すると、後期前葉が3基、後期中葉が5基、後期後葉が5基、終末期が3基となり、各時期はほぼ均等に出現していることになる。

また、焼失住居は、遺物出土量の違いから、床面遺物を多く含むもの(A型)、床面遺物が少ないもの(B型)に分類されている。A型は不意の出火で日常用具を運び出すゆとりがなかったもの、B型は日常用具を運び出した後の焼失で、意図的に放火された可能性が高いものと理解されている<sup>④</sup>。

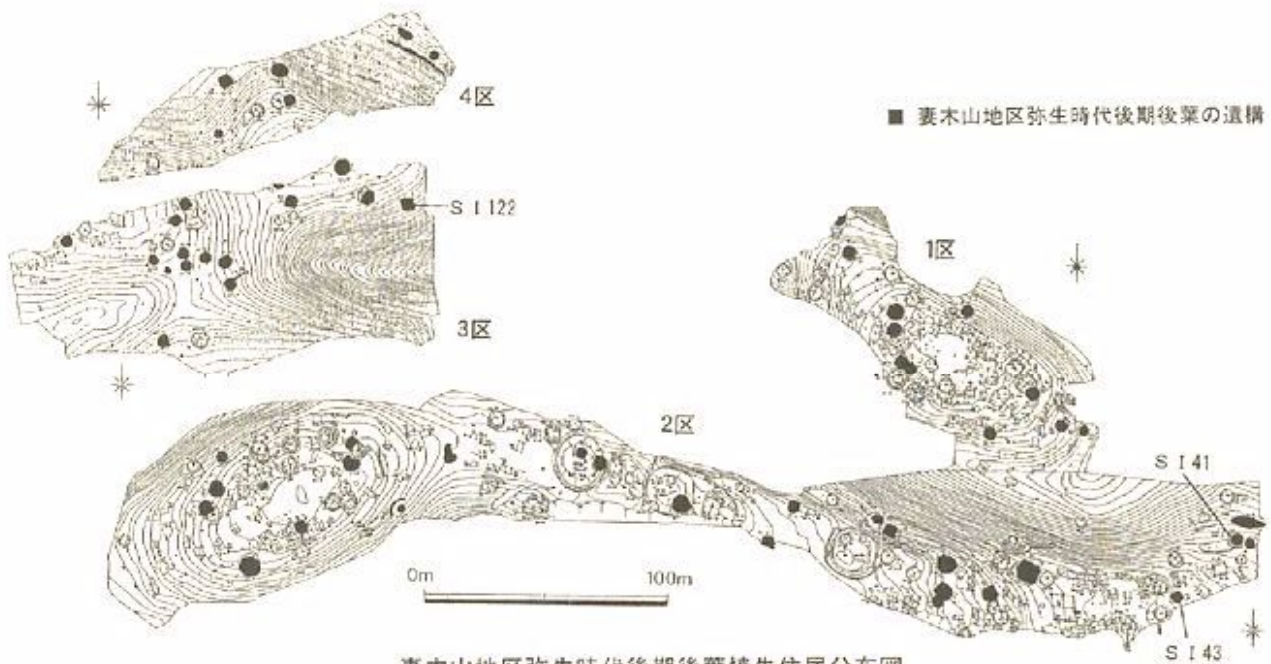
当遺跡の場合、A型は古墳時代前期後半で1基確認されたのみで、弥生時代後期では16基全てがB型であることから、この時期に住居を故意に放火したものが存在する可能性が指摘できる(表Ⅱ-1-2)。さらに、ほとんどのものが放火後は片付け行為をされることなく、そのまま廃棄された状況であったと言える。当遺跡において、弥生時代後期にA型焼失住居が全くないのかどうかは、全ての遺構を掘り上げなければわからないが、ほぼ主要な箇所が調査されている現状を考えると、B型のみ検出されているのは、当遺跡の特長といえよう。

さて、焼失住居の分布状況を見てみたいが、当然のことながら、集落内で同時並存する住居及び焼失住居を抽出することは困難である。同一型式内の土器が示す時間幅における出現数と出現率をみると、

- ① 弥生時代後期前葉では松尾頭地区1基(25%)、妻木新山地区2基(10%)



松尾頭地区弥生時代後期中葉焼失住居分布図



妻木山地区弥生時代後期後葉焼失住居分布図

図Ⅱ-2-1 妻木晩田遺跡主要地区の焼失住居分布図



表Ⅱ-1-1 鳥取県における焼失住居一覧

遺跡名	所在地	遺構名	規模(長軸×短軸-深さ)m	平面形状	遺構型	時期	基致	炭化物の種類・その他
大橋遺跡	鳥取市	S1001	8×8-?	隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木・檜木・榎・茅・竹、焼土
西桂見遺跡鷲谷口	鳥取市高住字鷲谷口	S101	5.17×4.3-0.8	隅丸方形	B	弥生時代後期中葉	1	垂木・柱、焼土
西桂見遺跡鷲谷奥A区	鳥取市高住字鷲谷奥	S109	4.13×4.54-0.67	円形	B	古墳時代前期前半	1	垂木、焼土
柄内目遺跡	気高郡鹿野町鹿野字柄内目	CS131	7.1×7.1-0.12※	円形	外炭B	弥生時代後期中葉	1	炭化物
		S102	4.45×3.30↑-0.48	方形	外炭B	古墳時代中期後葉	3	炭化物・焼土
小浜ワラ畑遺跡	東伯郡泊村小浜字ワラ畑	S105	4.4×3.5-0.65	方形	B	古墳時代中期後葉	3	炭化物・焼土
		S107	5.08×4.10-0.89	方形	全炭A	古墳時代中期後葉	1	炭化物・焼土
石籠第3遺跡保り地区	東伯郡泊村石籠字保り	S102	5.0×4.86-0.74	円形	外炭B	古墳時代前期前半	1	垂木・板・母屋桁、茅
寺戸第2遺跡	東伯郡泊村石籠字久塚	S103	5.56×3.86-0.88	長方形	A	古墳時代前期前半	2	炭化物
		S105	5.4×4.84-0.83	隅丸方形	A	古墳時代前期前半	2	炭化物
石籠第1遺跡	東伯郡泊村石籠字野羅	S101-5	6.93×5.75-0.92	長方形	A	古墳時代中期中葉	2	炭化物・焼土
		S107-1	5.9×4.9↑-0.85	長方形	B	古墳時代中期中葉	2	炭化物・焼土
宇谷第1遺跡	東伯郡泊村宇谷字野谷熊	S105	6.1×5.4-0.39	隅丸方形	B	弥生時代後期後葉	1	屋内貯蔵穴内に垂木、カヤ
		S1219	4.32×4.18-0.68	方形	A	古墳時代後期後半	2	炭化物
長瀬高浜遺跡	東伯郡泊村合町長瀬字高浜	S1259	3.98×3.90-0.58	方形	B	古墳時代中期前葉		炭化物
		AS101	6.5×5.8-1.19	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・柱・梁・板材・茅、砂礫層
		BS101	4.65×4.50-0.47	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・柱・梁・板材・茅、砂礫層
		BS109	6.38×6.32-0.72	方形	外炭A	弥生時代後期後葉		垂木、焼土
		BS113-3	3.7×3.7-0.12	方形	内炭B	古墳時代中期後葉		炭化材
		BS117	2.8×2.78-0.33	隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木
		BS120	6.14×6.00-1.37	隅丸方形	全炭B	古墳時代前期前半		垂木・梁・柱・板材・母屋桁・茅、焼土・炭
南谷大山遺跡	東伯郡羽合町南谷字大山	BS130-13	15×2.79-0.12	方形	A	古墳時代中期後葉	13	焼土
		BS136	2.9×2.7-0.4	隅丸方形	内炭B	弥生時代後期後葉		炭化材
		CS111	4.11×3.4↑-0.63	長方形	A	弥生時代後期後葉		炭化物・焼土
		CS112	4.90×3.7↑-1.30	長方形	A	古墳時代前期前半		炭化物
		CS113	3.7×2.7↑-0.62	隅丸方形	B	弥生時代後期後葉		炭化物
		CS114	2.68×2.23-0.19	長方形	A	弥生時代後期後葉		炭・灰層
		CS121	4.2↑×2.90-0.43	長方形	B	古墳時代中期後葉		垂木、焼土
南谷ヒジリ遺跡	東伯郡羽合町南谷字ヒジリ	S105	5.5×5.5-0.52	隅丸方形	内炭A	古墳時代前期前半	1	垂木、焼土、砂礫層
米里三ノ湯遺跡	東伯郡北条町米里字三ノ湯	S11	5.5×5.4-	円形	B	弥生時代後期後葉	1	炭化材
丸山遺跡	東伯郡三朝町今泉字美ノ田	S119	4.8×4.8-	隅丸方形	A	弥生時代後期後葉	2	炭化材、焼土
		S126-4	5.7×-	方形	A	弥生時代後期後葉		垂木、焼土
		S101	4.21×4.19-0.66	円形	内炭B	弥生時代後期後葉		垂木?
		S104	5.26×5.14-0.38	円形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・柱、焼土
		S111	4.42×3.69-0.26	隅丸方形	全炭A	弥生時代後期後葉		垂木、焼土
水溜まり・駕籠張湯遺跡	東伯郡東伯町磯下	S112	7.30×6.96-0.64	六角形	全炭B	弥生時代後期後葉	7	垂木、焼土
		S118	3.53×3.50-0.29	円形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木?、焼土
		S121	8.63×7.95-0.53	円形	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木?、焼土
		S122	4.24×4.18-0.36	隅丸方形	外炭A	弥生時代後期後葉		垂木?
大峰遺跡	東伯郡東伯町真盛字八幡ノ内大峰	S103	5.16×4.16-0.55	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木・柱・茅
上種第1遺跡	東伯郡大塚町上種字宮惣	S112	7.60×5.50-0.60	六角形	全炭B	弥生時代後期後葉	3	垂木?・茅?



遺跡名	所在地	遺構名	規模(長軸×短軸-深さ)m	平面形状	土層階級	類型	時期	基數	炭化物の種類・その他
上種第5遺跡	東白郡大柴町上種字杉下山	SI36	5.69×5.66-0.51	隅丸方形	4	外炭B	弥生時代後期後葉		炭化材
		SI37	5.38×4.36-0.32	方形	?	外炭B	古墳時代中期前葉		炭化材
		SI10	6.12×5.90-0.56	隅丸方形	4	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木・梁?、焼土
		SI14	4.41×4.12-0.32	方形	4	全炭A	古墳時代中期後葉		垂木、焼土
		SI15	5.45×5.06-0.21	隅丸方形	4	全炭B	弥生時代後期後葉	4	垂木、焼土
		SI16	5.10×4.54-0.41	方形	4	全炭A	古墳時代中期後葉		垂木、焼土
上種第6遺跡	東白郡大柴町上種字保岡峯	SI05	5.65×5.29-0.81	隅丸方形	4	全炭A	古墳時代前期前半	1	垂木、焼土
		SI12	5.60×5.00-0.54	隅丸台形	4	全炭?A	弥生時代後期後葉	2	焼土・炭化物
青木第4遺跡	東白郡大柴町妻波字中峯	SI16	3.94×3.84-0.28	方形	4	全炭B	弥生時代後期後葉		炭化材
		SI04	(5.42×4.64-0.08)	隅丸方形	4	全炭A	弥生時代中期末葉	1	炭化材
西高江遺跡	東白郡大柴町西高江	SI07	6.4×6.4-0.2	方形	4	外炭B	古墳時代前期前半	1	炭化材、焼土
		SI06	6.6×6.3-0.7	五角形	5?	全炭A	古墳時代前期前半	2	垂木、焼土
西高尾台奥遺跡	東白郡大柴町西高尾字谷奥	SI15	4.9×3.7-0.4	長方形	2	内炭B	不明		炭化材、焼土
		SI02	5.5×-0.6	隅丸方形	4?	全炭B	弥生時代後期後葉	2	垂木、焼土
福庭遺跡	倉吉市福庭字長谷	SI03	5.5×-0.4	隅丸方形	4-5	全炭B	弥生時代後期後葉	2	垂木・柱、焼土
		SI02	4.94×4.78-	隅丸方形	4	外炭B	弥生時代後期後葉	2	炭化材・茅、焼土
眼部遺跡	倉吉市眼部字二塚	SI07	3.56×3.35-	隅丸方形	4	内炭B	弥生時代後期後葉	2	垂木?
		ASI02	3.91×3.74-0.2	隅丸方形	4	内炭B	弥生時代後期後葉		垂木・柱、焼土
観音堂遺跡	倉吉市上福田字観音堂	ASI11	5.4×5.0-0.53	多角形	10	全炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木、焼土
中峯遺跡	倉吉市四府字中峯	BSI14	7.48×7.36-0.4	六角形	6	全炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木、焼土
		SI01	7.4×7.3-0.46	六角形	6?	全炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木、焼土
遠藤谷峯遺跡	倉吉市四府字遠藤谷峯	SI01	3.7×2.7-0.6	隅丸方形	4	全炭B	弥生時代後期後葉	1	垂木・茅、焼土
		SI01	5.6×5.4-0.4	隅丸方形	4	?	弥生時代後期後葉	1	
コザノコウ遺跡	倉吉市尾原	SI03	4.4×4.1-0.7	方形	4	全炭A	古墳時代中期中葉	2	垂木?・茅・竹、焼土
		SI07	4.9×3.8-0.67	長方形	2	全炭A	古墳時代中期中葉		炭化材、焼土
頭根谷台遺跡	倉吉市谷字頭根後谷	SI03	5.9×5.8-0.28	五角形	5	全炭B	弥生時代後期前葉	2	炭化材、焼土・炭化層
		平地住居	8.2×-	見当不明	9	B	弥生時代前期後半		炭化材、焼土・炭化層
中尾遺跡	倉吉市大谷字中尾	SI05	5.05×4.92-0.57	不整形	4	内炭B	弥生時代後期後葉	2	炭化材
		SI09	6.2×5.48-0.47	六角形	6	全炭A	弥生時代後期後葉		垂木、竹
両長谷遺跡	倉吉市四府字両長谷	SI01	6.7×6.7-0.6	方形	4	B	古墳時代前期後半		炭化物
		SI02	5.2×4.9-0.8	方形	4	外炭B	古墳時代中期後葉		炭化材
夏谷遺跡	倉吉市和旧字夏谷池	SI03	3.6×3.2-	方形	2	全炭B	古墳時代中期前葉		炭化材(垂木、桁?)
		SI04	6.3×5.9-0.7	隅丸方形	4	外炭B	古墳時代中期前葉	8	炭化物
夏谷遺跡	倉吉市和旧字夏谷池	SI07	4.7×3.7-0.94	長方形	2	全炭A	古墳時代中期前葉		炭化材
		SI13	5.18×4.24-0.68	方形	4	内炭B	古墳時代中期前葉		炭化材
青木遺跡	朱子市青木・諏訪	SI18	6.58×6.31-0.52	方形	4	B	古墳時代中期前葉		焼土塊
		SI41	4.7×4.4-0.48	隅丸方形	4	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木(板)、焼土
青木遺跡	朱子市青木・諏訪	FSI09	4.3×4.2-0.25	隅丸三角形	3	?	弥生時代後期後葉		炭化物、焼土
		FSI10	5.44×5.08-0.45	円形	5	?	弥生時代後期後葉		炭化物、焼土
青木遺跡	朱子市青木・諏訪	FSI13	5.20×5.10-0.65	隅丸方形	4	全炭A	弥生時代後期後葉	7	炭化材
		FSI14	5.10×4.80-0.2	不整形	5+1	外炭B	弥生時代後期後葉?		炭化物、焼土
HSI32		5.09×3.90-0.82	長方形	2	外炭A	古墳時代前期前半		炭化材、茅、焼土	



遺跡名	所在地	遺構名	規模(長軸×短軸・深さ)m	平面形状	埋没状態	類型	時期	基数	炭化物の種類・その他
諏訪遺跡跡上大正地区	米子市別所字上大正	HS143	8.00×7.23-0.18	隅丸八角形	8	全炭B	弥生時代後期後葉	1	炭化材、焼土
		HS163	7.75×6.00-0.66	六角形	6	外炭A	弥生時代後期後葉		炭化物、茅、焼土
除田第1遺跡B区	米子市除田・大谷	SI02	5.0×5.0-0.15	円形	4	全炭B	弥生時代後期前葉	1	垂木、焼土
		SI05b	5.75×-0.26	隅丸六角形	6	内炭A	弥生時代後期後葉		炭化物、焼土
		SI06	5.6※×5.46-0.9	六角形	6	?A	弥生時代後期後葉	3	炭化物、焼土
		SI07b	6.0×5.4-1.12	六角形	6	?B	弥生時代後期後葉		炭化物、焼土
除田第6遺跡 (久幸地区)	米子市除田・大谷	SI05c	6.9×5.8※-0.25	隅丸八角形	8	外炭B	不明	2	炭化物、焼土
		SI06	6.00×5.45-0.46	隅丸方形	4	全炭B	不明		炭化物、焼土
々(天坂地区)	米子市除田・大谷	SI07	5.2※×2.5※-0.3	円形		全炭B	弥生時代後期後葉	1	炭化物、焼土
福市遺跡吉塚A-3	米子市福市	YA3SI05	4.27×4.00-0.44	隅丸方形	4	B	弥生時代後期後葉	1	焼土
吉谷上ノ原山遺跡	米子市吉谷	SI02	6.5×6.0-	隅丸方形	4	B	古墳時代前期前半	1	炭化物、焼土
喜多原第2遺跡	米子市泉字喜多原	SI01	4.0×3.73-1.6	隅丸方形	4	A	弥生時代後期後葉	1	茅炭化物、焼土
八重第3遺跡	西伯郡中山町八重	A地区SI05	5.5×5.1-0.44	隅丸方形	4	?B	古墳時代前期前半	2	
		B地区SI04	7.7×7-1.10	六角形	6+2	全炭A	弥生時代後期後葉		
退休寺遺跡	西伯郡中山町退休寺	SI01	推定径7m	円形	?	B	弥生時代後期後葉	1	住居中央に焼土
		SI01	4.8×4.8-0.1	円形	3	B	弥生時代後期後葉		炭化材、焼土
		SI03	5.0×5.0-0.25	円形	4	B	弥生時代後期後葉		炭化材、焼土
東高田遺跡	西伯郡名和町高田	SI06	3.78×-0.12	円形	8	B	古墳時代後期中葉	6	炭化材、焼土
		SI07	6.26×-0.18	円形	5	B	古墳時代後期中葉		炭化材、焼土
		SI09	5.0×4.8-0.65	隅丸方形	4	A	古墳時代前期前半		炭化材、焼土
		SI11	6.3×-0.25	六角形	6	A	弥生時代後期中葉		炭化材、焼土
		SI13	4.2×1.5↑-0.71	方形		A	古墳時代後期中葉	2	炭化物、焼土
百塚第4遺跡	西伯郡淀江町小波	SI19	4.73×2.73↑-0.31	方形	4	A	古墳時代後期中葉		炭化物、焼土
百塚第5遺跡	西伯郡淀江町小波字松戸波	SI08	3.5×3.5-0.8	方形	?	B	古墳時代後期前葉	2	炭化材(焼失したものではない)
		SI38	4.7×4.7-0.3	方形	4	全炭A	古墳時代後期前葉		垂木、焼土・ブロック
天下地遺跡	西伯郡淀江町平岡字天下地	SI03	5.5以上-0.36	円形	?	B	弥生時代後期後葉	1	炭化材、炭化物層
マケン堀古墳群	西伯郡西伯町原	SI01	4.8×4.65-0.76	円形	5	B	弥生時代後期	1	炭化材、焼土・炭化層
北福王寺遺跡	西伯郡西伯町原	SI01	5.30×5.25-0.25	五角形	5	内炭B	弥生時代後期前葉?	2	炭化物、焼土
		SI05	4.40×4.15-0.75	隅丸方形	4	外炭B	弥生時代後期前葉?		炭化物、焼土
		A-3E-SI-01a	8.0×-0.22	多角形	7	外炭A	弥生時代中期末		炭化材、焼土・炭化層
		E-1E-SI-01c	3.6×3.5-	隅丸方形	4	B	弥生時代終末		炭化物、焼土層
		E-1E-SI-02a	4.0×3.8-0.15	不整円形	4	外炭B	弥生時代後期前葉		炭化物、炭化層
		E-1E-SI-01	5.65×5.20-0.2	隅丸方形	4	外炭B	古墳時代前期前半	10	炭化物
		E-1E-SI-07	5.8×5.2-0.4	隅丸方形	4	外炭B	古墳時代前期前半		炭化材
		E-1E-SI-10	5.0×4.9-0.65	隅丸方形	4	外炭A	弥生時代後期後葉		焼土・炭化層
		E-1E-SI-12	7.0×-0.5	七角形	7	外炭B	弥生時代後期後葉		炭化材、焼土・炭化層
		E-1E-SI-14	4.2×4.1-0.86	隅丸方形	4	全炭B	弥生時代終末		炭化材、焼土・炭化層
		E-1E-SI-18a	9.2×8.8-0.2	九角形	9	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木、桁、焼土・炭化層
		E-1E-SI-21	9.0×8.3-0.36	隅丸方形	6	外炭A	古墳時代前期前半		柱、炭化材、焼土・炭化層
		I-3C-SI02	(5.4×5.3-0.5)	円形	5	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木、焼土層
		I-3C-SI08	(3.0×2.5-1.0)	長方形	2	全炭B	弥生時代後期後葉?	20	垂木・焼土
		I-3C-SI10	(6.6×6.2-0.65)	隅丸方形	4	B	弥生時代終末		焼土
越歌山遺跡	西伯郡会見町萩名								



遺跡名	所在地	遺構名	規模(長軸×短軸-深さ)m	平面形	形状	時期	基敷	炭化物の種類・その他		
田住松尾平遺跡	西伯郡会見町田住字松尾平	I-5・SI07	(3.9×3.6-0.80)	隅丸方形	内炭B	弥生時代終末	2	焼土		
		N-16a・SI05	(3.8×3.6-0.50)	隅丸方形	外炭B	弥生時代中期後葉		炭化材・茅・焼土		
		N-17・SI04	(4.6×4.2-0.60)	隅丸方形	外炭A	弥生時代後期後葉		垂木・焼土層		
		N-17・SI06	(5.5×5.4-0.70)	隅丸五角形	外炭B	弥生時代終末		垂木・焼土層		
		N-17・SI09	(5.2×-0.55)	隅丸五角形	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木・焼土		
		N-17・SI10	(5.0×-0.66)	円形	外炭B	古墳時代前期前半		垂木・焼土		
		N-18a・SI03	(7.2×6.5-0.80)	七角形	内炭B	弥生時代後期後葉		焼土・炭化物		
		N-18a・SI07b	(6.4×5.5-0.80)	楕円形	内炭B	弥生時代後期中葉		焼土・炭化物		
		N-18a・SI08	(5.0×4.9-0.72)	隅丸方形	内炭B	弥生時代後期後葉		焼土・炭化物		
		N-18a・SI11	(5.8×5.6-0.68)	隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木・焼土		
		N-18b・SI08	(6.6×6.4-0.70)	六角形	外炭A	弥生時代後期後葉		垂木・焼土層		
		N-18b・SI14	(3.4×2.7-0.38)	楕円形	B	弥生時代後期後葉		焼土層		
		N-19b・SI02	(7.8×7.7-0.75)	円形	B	弥生時代後期中葉		焼土層		
		N-19b・SI03	(5.3×4.9-0.85)	隅丸方形	B	弥生時代後期中葉		垂木		
		N-19b・SI14	(5.0×5.0-0.75)	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・焼土層		
		N-19b・SI21	(5.6×-0.35)	円形	全炭B	弥生時代中期後葉		垂木・焼土層		
		N-20b・SI03	(5.1×-0.70)	隅丸方形	B	弥生時代後期後葉		焼土層		
		SH		4.7×4.7-0.62	隅丸方形	内炭A		弥生時代後期後葉	2	中央ピット周辺に炭化材
		SI2		3.0×3.0-0.6	隅丸方形	B		弥生時代後期後葉		床面に炭化物層
		萩名第5遺跡	西伯郡会見町萩名	SI03	6.7×6.0-0.78	楕円形		外炭A	弥生時代後期後葉	2
SI04	5×4.8-0.4			隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉	垂木・焼土			
萩名第3遺跡	西伯郡会見町萩名字天野他	SI05	4.2×2.7-3.2-0.30	長方形	全炭?A	弥生時代後期後葉	1	炭化物		
		MJSI03	4.26×3.82-0.85	隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉		垂木・焼土		
		MJSI09	7.74×2.24↑-0.8	隅丸五角形	B	弥生時代後期後葉		焼土		
		MGSJ03b	4.80×4.62-0.22	円形	外炭B	弥生時代後期後葉		焼土		
		MGSJ09c	5.14×4.60-0.54	円形	全炭B	弥生時代後期後葉		焼土・炭化材		
		MGSJ12b	5.20×5.15-0.28	不整形	外炭B	弥生時代後期後葉		焼土・炭化材		
		MGSJ14b	4.38×4.26-0.4	円形	B	弥生時代後期中葉		炭化物・焼土		
		MGSJ34c	6.65×6.35-0.52	隅丸方形	B	弥生時代後期後葉		炭化物・焼土		
		MGSJ52b	5.30×4.90-0.56	円形	B	弥生時代後期中葉		炭化物・焼土		
		MKSJ13	6.11×5.63-0.76	隅丸方形	内炭B	弥生時代後期後葉		焼土		
		MKSJ41	4.20×4.04-0.50	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・板材・焼土		
		MKSJ43	4.23×3.90-0.44	隅丸方形	全炭B	弥生時代後期後葉		垂木・板材・茅・焼土		
		MKSJ97	4.10×3.80-0.53	方形	A	古墳時代前期後半		焼土		
		MKSJ103	3.71×3.47-0.88	隅丸方形	内炭B	弥生時代後期後葉		焼土・炭化物		
		MKSJ122	4.10×3.77-0.60	隅丸方形	外炭B	弥生時代後期後葉		炭化材・焼土、炭化系		
		MNSJ10	3.35×2.85-0.58	隅丸方形	外炭B	古墳時代前期後半		炭化物		
		MNSJ38b	4.76×4.62-0.52	円形	全炭B	弥生時代後期後葉		炭化材・焼土		
		MNSJ42b	5.50×5.40-0.42	円形	全炭B	弥生時代後期前葉		炭化材・焼土		
MNSJ45b	6.20×5.42-0.38	円形	内炭B	弥生時代後期前葉	炭化材・焼土					
計							165			

遺構名は報告書ごとに記載方法が異なっているが、概直上壁穴住居はSIとして表記した。規模は、床面の規模。( )は、検出面での規模。↑は、数値以上。  
注) 時期は、布留並行期以降を古墳時代として考えた。



- ② 後期中葉では松尾頭地区4基(20%)、妻木新山地区1基(4%)
- ③ 後期後葉では松尾頭地区1基(5%)、妻木山地区3基(5%)、妻木新山地区1基(6%)、松尾城地区1基(20%)
- ④ 終末期では松尾城地区1基(20%)、妻木山地区2基(5%)

となる。

表Ⅱ-1-2 妻木晩田遺跡焼失住居の類形

	棟数	A型	B型	不明	B型の割合
弥生時代後期	16	0	16		100%
前葉	3	0	3		100%
中葉	5	0	5		100%
後葉	5	0	5		100%
終末	3	0	3		100%
古墳時代前期	2	1	1		50%
前半	0	0	0		0%
後半	2	1	1		50%

表Ⅱ-1-3 鳥取県内焼失住居の類形

	棟数	A型	B型	不明	B型の割合
弥生時代前期	1	0	1		100%
後半	1		1		100%
弥生時代中期	4	2	2		50%
前葉	0	0	0		0%
中葉	0	0	0		0%
後葉	4	2	2		50%
弥生時代後期	108	21	86	1	80%
前葉	8	0	8		100%
中葉	13	1	12		92%
後葉	79	20	58	1	73%
終末	8	0	8		100%
古墳時代前期	22	11	11		50%
前半	18	9	9		50%
後半	4	2	2		50%
古墳時代中期	23	11	12		52%
前葉	6	1	5		83%
中葉	4	3	1		25%
後葉	13	7	6		46%
古墳時代後期	3	1	2		67%
前葉	1	0	1		100%
中葉	1	1	0		0%
後葉	1	0	1		100%
終末	0	0	0		0%
不明	4	0	4		100%
計	165	46	118	1	72%

この出現状況は、各地区の集落規模の変遷と同調しており、また、住居の規模には大小係らずに認められる。放火行為自体は各集落の消長によって増減しているといえる。特に、後期中葉の松尾頭地区、後期後葉の妻木山地区ではその傾向が窺われる(図Ⅱ-1-1)が、集落全体に対しての割合は低いといえる。

また、各時期、各地区とも焼失住居が集中して検出される状況はなく、散在する状況が見て取れる。このことは、放火行為によって他の住居が類焼したと考えられる状況ではないと判断される。おそらく、類焼しないように管理された中での放火行為であったものと推定できる。

その背景には、石野氏等が指摘しているが、「忌避的放火」、「住居の焼却廃棄」、「戦火」等が想定できる。このうち、「戦火」であるならば当然は同時期に多数の焼失住居が集中していてもよく、A型焼失住居の割合が高くなる可能性が考えられる。しかし、その状況は窺われないことから、「戦火」以外の要因があったものと判断される。戦乱に使用されたと考えられる武器類の出土がほとんどないことも、このことを裏付けるものと思われる。

具体的に「放火行為」の背景を考えるには、さらに状況証拠について検証しなければならないが、最も単純に考えれば、「住居の焼却廃棄」の一手法であったものと思われる。しかし、各地区集落に対する割合の低さは、それ以外の理由を考えなければならない、今後の課題である。

### (3) 鳥取県内の焼失住居

さて、妻木晩田遺跡の他に鳥取県内では、大規模な開発行為とともに大規模な発掘調査が行われ、米子市青木遺跡、会見町・岸本町にまたがる越敷木山遺跡、羽合町南谷大山遺跡など集落のほぼ全域が明らかにされたものである。

このうち、県内では弥生時代から古墳時代にかけての焼失住居跡が、管見に触れる限り56遺跡165例確認されている(表Ⅱ-1-3)。

妻木晩田遺跡同様、とりわけ弥生時代後期に焼失住居跡が格段に多く確認されている。さらに、土器の出土状況分類によるB型焼失住居の割合が80%にも上ることが

注目され、やはりこの時期に、意図的放火された住居が多数存在していることが指摘できる。弥生時代後期を前後する時期には、B型は50%前後であることを考慮すると、弥生時代後期の特殊性が浮き彫りになるといえる。

この時期の主な集落遺跡として、南谷大山遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、青木遺跡、天王原遺跡、越敷山遺跡があるが、いずれもB型焼失住居が卓越していること、いずれの遺跡も丘陵上に立地していることが共通している。しかし、これらの遺跡内には、少なからずA型焼失住居が検出されており、妻木晩田遺跡とは若干異なる様相が窺われる。

個別にみると、水溜り・駕籠据場遺跡においては、大型のS I 12、中型のS I 11が近接しており、類焼した可能性がある。S I 11はA型、S I 12はB型であることから、S I 11が火元である可能性がある。

南谷大山遺跡では、後期後葉から終末にかけて散在的に分布しているが、小型住居の焼失住居が比較的多い特長がある。

青木遺跡も散在的な状況で、中型から大型の焼失住居がみられる。

越敷山遺跡も散在的な状況で、大型から小型のものが認められ、南谷大山遺跡に近い状況が窺われる。

このように、各遺跡の状況を見ると、遺跡毎で焼失住居の出現状況が若干異なっている。

県内の状況を見る限りでは、丘陵上に展開する遺跡において、弥生時代後期に意図的放火行為による住居が多数存在し、このことが社会的な現象として現れているといえる。しかし、いずれの遺跡も同時期の集落全体に対する割合が低いことから、焼却廃棄しなければならない何らかの理由があるのかもしれない。その背景については、今後詳細に検討しなければならない課題である。

#### (4) 焼失住居を巡る問題点

ところで、焼失住居から得られる情報は、上屋構造の復元に留まらず、絶対年代の把握、住居内部構造の復元、構造材の樹種を同定することで周辺環境の復元、自然環境の利用状況、集落廃棄の社会的背景などを考える材料となる。

妻木晩田遺跡の場合、各焼失住居跡の構造材の部位が明らかにされていないこと、樹種同定がほとんどされて

いないこと、年代測定が行われていない等の問題点があり、今後の調査によって、新たにデータを蓄積していく作業が必要となる。

調査に携わる者として、できる限りの情報を引き出すことが、当時の社会を復元する材料であることを忘れてはならない。  
(牧本哲雄)

#### 註

- (1) 平成13年度現在の確認数
- (2) 寺沢薫 1979  
「火災住居覚書—大阪府観音寺山遺跡復元住居の火災によせて—」『書陵』40号 横塚考古学研究所
- (3) 浅川滋男編 1996  
『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 先史日本の住居とその周辺』同成社  
浅川滋男編 2001  
「竪穴住居の空間と構造」『日本文化財資料集2』
- (4) 石野博信 1985  
「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』1990  
「第5章 火災住居跡の課題」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館再録



図Ⅱ-2-3